



# 第1章 双極の

## 爪痕

### 1・1

私たちの生活は——それほど変わらなかつた。

「もうすぐ春休みですねえ」

私たち二人と、アヤメの仲はすっかりよくなって、いまはこうして、一緒にお昼ご飯を食べられるぐらいになっている。

「そうね。まだ貴方達は一年だからわからないと思うけど、春休みは死ぬほど退屈よ」

「そうなんですか？ 春休みなんてすぐ終わる、つて感覚じゃないんですけど」  
「そうそう、中学校の時なんてそうだったよねー」

「この春休みは一ヶ月以上あるの」  
「一ヶ月！」

「そうよ。それに、宿題も多分一年生のときは大して出ないから、本格的にやることないわよ」

「自分のやるべきことを、見つけろってことですかね」

「一応、自主学習しろとか言われるけど、私はやらない」

「そうですよ、勉強なんて面倒くさいだけ」

「そんなこと言ってるか、セレナはテストで点取れないんだよ」

「赤じゃないから、いいの」

「セレナ、油断大敵よ。いまはまだいいかもしれないけど、二年はもつと厳しくなるわよ。実際に落ちるときは落ちるから。取れる点は取っておくべきよ」

「うっ、はい」

私たちの会話は、なんら普通の人間と変わらない、他愛のない日常の風景だった。

初めての狩り、あれからすでに二ヶ月ほど経ったが、その後の狩りは両手で数え切れるほどしかなく、どれもまた最初の獲物と多少大小する程度のことを相手

にするだけで、私たちが出会った一番最初の悪夢、あの恐怖の塊に比べれば、可愛いものだった。

だが、経験は溜まっていた。私たちはアヤマから、狩りの手ほどきを受け、それなりの狩人になれたと思っている。

睡眠学習とはよく言ったものだが、本当に、狩りの夜に学んだことは、たとえばそれが一度だけでそれも眩き程度のものであっても、一語一句覚えていくのだ。きつとこの夜に勉強できたら、どんなにいいだろうか。まあ、そんな余裕はないのだが。

しかし、狩りの夜から目覚めても、不思議と疲労はないのだ。私はよく勉強疲れをするタイプで、暗記する時に顕著な

のだけれど、狩りの学習に、倦怠感を伴ったことは一度もない。むしろ、目覚めはよく、頭の中が綺麗さっぱり洗い流されている。だるさはなく。それは生理のときもそうだった。精神的な満足感によるものだろうか。それもまた、私たちが狩りの夜に馴染んでいくのに、大いに役立った。